法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

「ザー」の発掘調査にみる宮古島狩俣集落と祭祀の展開

石井，龍太

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
50
(開始ページ / Start Page)
79
(終了ページ / End Page)
117
(発行年 / Year)
2023-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030081

「ザー」の発掘調査にみる宮古島狩俣集落と祭祀の展開

石井龍太

はじめに

筆者は琉球諸島の歴史、特に近世琉球期の民衆史研究を志し、多くの研究者たちの助力を得つつ、琉球諸島各地の集落遺跡を対象に発掘調査を実施してきた。ただ八重山諸島と沖縄島の集落、中でも近世琉球期から近代期へ移行する時期の調査研究に偏りがあった。

そうした中、宮古島最北の集落である狩俣集落（図1）の調査研究を続けておられる浦山隆一氏（建築史学）のお誘いを受け、2015年から狩俣集落における考古学的調査を継続してきた。まず過去に存在した囲壁に関心を寄せ、東側に残る土塁の測量（石井他2018）と発掘調査（石井2019b、c）を実施した。また発掘調査によって得られた資料を展示紹介するアウトリーチ活動

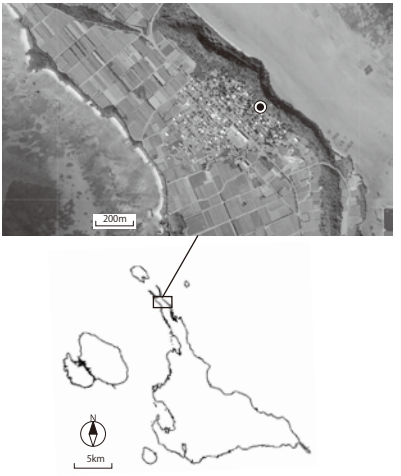
も実施した（石井２０１９ａ）。

筆者らは２０１９年に狩俣集落の聖地のひとつ「ザー」の測量と発掘調査を実施した。「ザー」は狩俣集落のほぼ中央に位置し、緩傾斜の広場空間内の奥に石積、更にその奥に建屋が置かれる。本稿は調査によって得られた多くの知見を踏まえて、狩俣集落の伝統祭祀と集落の歴史について考察するものである。

なお最初に表記を整理しておきたい。本稿で扱う「ザー」は、一般には空間も建屋も特に分別せず「ザー」という呼称が用いられている。ただ表記は資料・論考によって「座」「座屋」「座家」「座御嶽」「ザー」「ザーヌムトゥ」「ザーヤー」等、多岐に渡る。

新里幸昭氏は「ザーという神庭」「ザーヤーと呼ばれる神屋」と表記している（新里１９９３：２３２）。また奥濱幸子氏はザーの庭を「ミナー（中庭）」と表記している（奥濱２０２０：２２６他）。これら先行研究の表記を参考に、本稿では空間全体を「ザー」、空間内の建屋を「ザーヤー」、空間内の庭を「ミナー」と表記することとする。

図１　狩俣集落とザーの位置



1．先行研究

「狩俣は、記録されるという特徴を持った集落である」（内田２０００：８）と形容されるほど、狩俣集落に関する先行研究は多く、また幅広い領域に及んでいる。

ただし分野による偏りは大きく、本稿で扱う考古学の先行研究は豊富とは言えない。１９６９年８月に沖縄大学が先駆的な調査を実施しており（比嘉編１９７０）、土器、陶磁器、須恵器、紡錘車、貝製品、石器を採集し、集落の上方（後方の丘陵側）と下方で主体となる土器が変化することを指摘、細かな分類を行っている。この他、沖縄県による遺跡分布調査が行われ、集落後方の丘陵地に狩俣遺跡の存在が確認されている（沖縄県教育委員会１９８３：18、63）。

本稿ではザーに関する論考を中心に、民俗学、文献史学、伝承に大別して先行研究を略述する。

1－1．民俗学の先行研究

ザーに関する最古の調査は鎌倉芳太郎氏によってなされた。鎌倉氏は１９２３年に狩俣を訪れ、ザーを含めた聖地の詳細な調査を実施し、貴重な写真と図面を残している（図２－１～４　鎌倉１９８２：13、20－22、28）。鎌倉資料と突き合わせることにより、およそ１００年前と現在の状況を比較し、その間に進行した変化を追うことが可能である。

「ザー」は「座御嶽zanuutaki」と表記され、写真撮影と採寸、スケッチが残されている。ザーヤー

は「座御嶽神殿」と表記され、写真を見る限り屋根は茅葺きであった（図2－1）。またザーヤーの床面は、東側が床から一尺の高さに藁が積まれて寝台の様に作られており、祭祀でザーに籠る際に使用したとされる（図2－2、3　鎌倉1982：28）。図に付されたメモによれば、「四モトノ「ウヤパ」」四人と「ザヌヌシ」一人の計5人が、夜籠（yugumugu）願（Kumugu-negazu）の時に座る場であり、他の人は下に座る、と記されている（図2－3　鎌倉1982：22）。

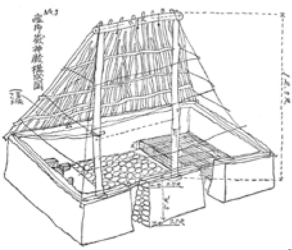
そして西側には香炉（koro）が置かれ、シャコガイらしいものも香炉のそばに置かれる。その前には「火の神」（ukamagam）の石3個が並ぶ炉（ukama）があり、壁際にはタモン（tamunu）と呼ばれる後ろの山から取った薪が積まれ、そのすぐ上の壁の上面には茶碗とマッチが置かれていたと記録される（図2－2～4　鎌倉1982：22、28）。鎌倉氏は、ここで火を燃やし夏至か冬至の朝に日の出の太陽を拝むと推察しており、その夜籠りの際には座の主と狩俣四元から出るウヤバ（男性）四人が参加して儀式を行い、供物として海の幸の魚、蛸を捧げたと記録する（鎌倉1982：28）。

また文章による記載はないが、ザーの床中央には北壁に接して6．7尺×7．7尺の範囲に「tamauginurpa」と記載される丸石と思しきものが敷かれていることも確認できる（図2－2、3　鎌倉1982：22）。

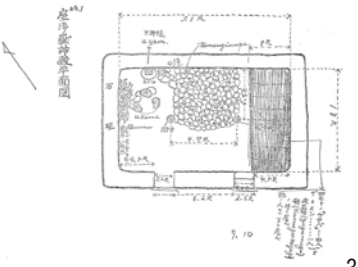
ザーが関連する狩俣の年間祭祀は多い。佐渡山氏は「ザーヌムトゥ」と紹介し、ザーとは人々が集まる所の意であり、ムラの行事や祭事などはここを中心にして繰り広げられるとする（佐渡山

図２　先行研究にみるザーヤー

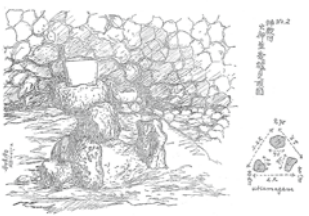
1



2



3



4

5

1、茅葺屋根のザーヤー全景　　2、ザーヤーの構造図　　3、ザーヤーの平面図
4、ザーヤー内部の火の神及び香炉の見取り図　　5、セメント瓦屋根のザーヤー全景

２００８：13）。中でも旧暦10月から12月に5回行われる伝統祭祀ウヤーン（ウヤガン）は強い結びつきを持っている。奥濱幸子氏によれば、午の方向から来訪する世ぬ神を迎え、集落に世果報が満ちるように祈る豊穣祈願とされる（奥濱２０２０：２１０）。そしてザーはウヤーン祭祀の中で重要かつ立ち入りを禁じられる北の山の祭場と同様な機能を有し、対応する祭場であると評価している（奥濱２０２０：２６２）。

これまでの先行研究から、ザーと結びつく年間祭祀の概略をまとめると左記の通りとなる（祭日は旧暦）。

- ザー願いとヨーイウプナー　1月15～19日。神女はザーに泊まる。2日目は各自の家や各元で旧十六日祭、17日にはブンミャーでクイチャーを踊る。20日の朝帰宅する（狩俣２０１１：２９９－３００）。
- 大世鎮　4月卯～辰。神女たちはザーに集まり、ザーヤーで祭事が始まる。その後一般女性も集まってザーの庭でピャーシを謡って奉納する。2日目にはザーの庭に集まった神女全員で「大世鎮ぬピャーシ」を謡い奉納する（狩俣２０１１：３０４）。
- 芋豊礼　4月巳～申。ザーで実施。あらかじめ集めた芋で神酒を作り、神女以外の50歳以上の女性も参加してピャーシが謡われ、芋の豊作を祈願する（狩俣２０１１：３０５）。

- ヂーブバナ（ウヤーン第一回目）　10月丑〜午。神女たちは大城元・大母家・白サグ等での儀礼の後、ザーへ移動し、北の山に上がる。辰の日の午後にザーへ降り、中庭（ミナー　ザーの庭）で満座を作って神謡を詠む。儀礼を追えると、神衣装をザー外周の戌亥の方角（北西）にある所定の位置（奉納口）に納める。この晩はザーヤーで宿泊する。翌朝、集落の人に遭遇しない様に帰宅する（奥濱２０２０：２２３－２２６）。
- イダスカム（ウヤーン第二回目）　11月初酉〜午。神女たちはあらかじめ用意した神衣装を懐に忍ばせてザーに集まり、その後後背に位置するティンドーへ上がり神謡を詠む。そしてティンドーで人から神になるための儀式（祖神の孵化）を行い、神衣を着け、再びザーに降りる。その後北の山へ入る。戌の日午後８時ごろに山から下り、内定していた新しいウヤーンの自宅を訪問し、伴って再び北の山へ入る。亥の日には世果報祈願、子の日にはアサーンの儀礼や満座が行われる。子の日の最後にザーで神衣装を解き、外周の北西に納める。その後再びティンドーへ上がり、後背の稜線を走る干瀬の道を通って北の山へ籠る。これを「白鳥になって飛ぶ」と表現する。その後再びザーへ移動し、北西角の所定の場所に諸々の植物による祭具を納める。その後祭祀は午の日まで続けられる（奥濱２０２０：２３１－２３６）。
- スマバイウヤーン（ウヤーン第三回目）　11月申〜亥。前日に上草冠の材料を採取しザーで形を整えて保管する。また手草はザーからティンドーへ上がる道の傍らに置かれる。申の日の午

後、神女たちはマトゥガヤーに集合、次いでザーへ移動して草冠と手草を持ち、ザーからティンドーへ上がり北の山へ入る。酉の日の午後9時ごろ、北の山を出て各戸の厄払いを行い、その後再び北の山へ入る。戌の日はティンドーで神謡を詠んだ後、北の山へ上がり、ザーに降りて満座を行い、上草冠や手草等をザー外周の戌亥の方角（北西）の所定の位置に納める。さらにザーヤーにて新しい神女の儀礼が行われる。ザーヤーで宿泊し、亥の日翌朝自宅へ戻る（奥濱２０２０：２４０－２４３）。

- アーブガー（ウヤーン第四回目）　11月寅～辰。スマバイウヤーンと同じように、前日の丑の日にザーで草冠が用意、保管され、また手草がティンドーへ上がる道の傍らに置かれる。初日の寅の日にはザーに集まって神衣を身に着ける。その後東門をくぐってグループに分かれて各所を回り、北の山へ上がる。卯の日には北の山からザーへ降り、草装を納めてザーに泊まり、翌朝自宅へ戻る（奥濱２０２０：２４５－２４７）。
- トゥディアギィ（ウヤーン第五回目）　12月初申～午。イダスカムと同じく、神女たちはあらかじめ用意した神衣を懐に抱えてザーに集まり、ティンドーに上がる。そしてティンドーでの儀礼を経て再びザーに降り、その後北の山に4日間籠って儀礼を行う。亥の日に北の山から降りて世果報祈願、亥の日から子の日にはアサーンの儀礼、三十三拝祈願、踊座での世果報儀礼を行い、満座を作って北の家元の儀礼、大城元の儀礼、前の家元の儀礼を行う。その後ザーへ

移動し、草装した諸々の植物を戌亥の方角（北西）の所定の位置（奉納口）に納める。各祭場で一泊する。その後も様々な儀礼が続き、午の日になって懐に神衣を偲ばせて帰宅する（奥濱2020：248-252）。

1-2. 文献史学の先行研究

『御嶽由来記』（1705～7年）や『琉球国由来記』（1713年）には、狩俣集落の発祥に関わる母の神の記載が見られる。狩俣集落東方の島尻當原に降りた「豊見赤星テダナフラ眞主」は、御嶽である大城山に独居し、蛇を父とする双子の男女を生む。男子の「ハブノホチテラノホチ豊見」は狩俣の氏神として崇敬された。そして女子の「山ノフセライ青シバノ眞主」は神になったという。『琉球国由来記』にはその詳細とその後の顛末が記されている。

十五六歳ノ比、髪ヲ乱シ、白浄衣ヲ着シテ、コウツト云フ、葛カヅラ、帯ニシテ、青シバト云葛ヲ、八巻ノ下地ノ形ニ巻キ、冠ニシテ、高コバノ筋ヲ、杖ニシテ、右ニツキ、青シバ葛ヲ、左手ニ持チ、神アヤゴヲ謡ヒ、我ハ是、世ノタメ、神ニ成ル由ニテ、大城山に飛揚リ、行方不知、失ニケル。依之、狩俣村ノ女共、年ニ一度完、大城山ニ相集リ、フセライノ祭礼アリ。夫ヨリ漸々、島中相廣メ、ヨナフシ神遊ト云テ、諸村ヨキ女共、毎年十月ヨリ、十二月マデ、月ニ五ケ

日完、精進潔齋、山ノフセライノ、裳束ノヨウニシテ、昼中ハ野山ニ閉籠リ、晩景ニハ諸村根所ノ、嶽々ニ馳セ集リ、臼太鼓ノヤウニ立備ヒ、神アヤゴトテウタヒ、世ガホウヲ願ヒ、神遊仕タル処…

（伊波他１９６２：５８９－５９０）

「島中相廣メ」と記載されることから、宮古各地で行われる祭祀の「由来」が狩俣であるとする言説が、18世紀から存在することをうかがわせる（内田２０００：７）。

なお『琉球国由来記』によれば、康熙16年（１６７７年）に「民ノ疲労」を理由としてこの祭祀は禁制とされている（伊波他１９６２：５９０）ことから、ウヤーンの原型となるこの「フセライの祭礼」は17世紀後半までに開始されていたと考えられよう。ザーに関する言及は無いが、ウヤーンの原型が17世紀後半まで遡るのであれば、ウヤーンと強く結びついたザーの成立もまた17世紀後半まで遡る可能性を考えなければならないであろう。

そして集落では禁令にも関わらず、祭祀を継続した（あるいは復活させた）らしく、およそ半世紀後に通達された『与世山親方規模帳』（１７６７年）には、狩俣と島尻においてウヤーンと思われる祭祀の禁止令が記されている。

一、狩俣村之儀五拾歳以上之女三拾人程白衣裳ニ而神之真似いたし十一月者神出十二月者送与〆毎年弐度完昼夜三日山奥ニ隠居夜更候時分人目を忍大城本西之家本両所江寄合躍候旧例有之由不宜候間向後可召留事

（平良市史編さん委員会1981：630－631）

ここでは祭祀の詳細は省かれているが、年配の多くの女性が白い神衣装をまとって神のまねごとをし、年末に現れること、三日間の山籠もりをすること、人目を忍ぶこと、「大城本」すなわち大城元や西之家本に集まることが記され、更にこれが禁じられている。現代に確認されるウヤーンと共通点が多く、同様の祭祀の禁止令とみてよいだろう。この他にも狩俣と島尻には、快気祝いや祭祀の際の神酒作りを禁じる等、様々な祭祀簡略化が命じられている。

ただ祭祀は止まず、『宮古島在番記』乾隆58年（1793年）8月の記事には、祭祀を旧来通り認める記載が見られる。

一　両先島之儀往古ヨリ老若男女節々祈願祭事執行野原濱邊へ罷出遊事ヲモ為有之事候へ共乾隆三十二年亥年御検使被差遣候節被召留置候然ル処百姓之儀何方モ同然不断致苦労者ニ候処右式有来儀共差留候テハ却テ相怠農業等之励ニモ不相成其上往古之旧俗相止候迚向レモ不安ニ

可存事ニ候故此節ヨリ都テ跡々ノ通御免被仰付候条祈願祭事遊事等有来通執行農務夫々ノ職事猶以出精相働候様可被申渡旨御差図ニテ候以上

丑八月　　天願親雲上

具志川親方

（平良市史編さん委員会１９８１：１０５）

１－３．伝承

管見の限り、近世琉球期以前の文献資料にザーに関する記載はないが、その由来に関する狩俣集落の伝承があるという。伝承によれば、第一尚氏第７代国王の尚徳王が粛清を逃れて狩俣に辿り着き、「ユマサイ（世優）主」と呼ばれて慕われたという。そして森を拓いて広場を作り、村人たちを集めて学習させていた場がザーであるという（狩俣歴史文化村創成会２０１５：12）。

２．測量・発掘調査

上述の通り、筆者はこれまでに琉球諸島各地の集落遺跡において発掘調査を実施してきた。狩俣集落を巡る重厚な先行研究を踏まえた上で、踏査と遺跡の測量、発掘調査を２０１５年から継続してきた。

本稿で扱う2019年春の「ザー」「ザーヤー」調査は、筆者たちにとって2度目の発掘調査となる。調査に当たっては、当時のアブンマと自治会長を通じて自治会に調査可否の審議を依頼し、了承を得た[1]。また調査期間中は必要な機材の確保等、様々なご後援を頂いた。

2－1．調査の経緯

調査は2019年4月27日から5月6日まで実施した。前半は少数名による測量が行われ、5月1日からザーヤー内にトレンチ（発掘坑）を設けて調査を行った。参加メンバーは以下の通りである。

石井龍太（調査団長）、山本正昭、阿部常樹、深山絵実梨、角道亮介、飯島春樹

ザーヤー内部は暗く蒸し暑かったため、隣家からコンセントを引き、電灯と扇風機を持ち込んでの調査となった。また実施に当たっては事前にアブンマ（当時）の下地克子氏に神願いをしていただき、調査チームが揃った5月1日に改めて神願いをしていただいた（図3）。

図3　下地克子氏による神願い（2019年5月1日）

2－2．測量調査の成果

調査はまず「ザー」の地表面上に確認できる諸施設を把握することから開始した。全体の草刈りと踏査を行い、確認された施設の諸特徴を確認し、測量を行った。

ザーヤー

ザーの奥に位置する建物であり、ウヤーン祭祀の際に祈祷や宿泊が行われる重要な施設である。鎌倉資料では「座御嶽拝所」とされる。

ザー自体が標高約４ｍの斜面地に築かれているが、ザーヤーの床は低平である。ザーの断面図（図４－１－１）を見ると、傾斜の高い個所を削り、低い個所に土盛りして平坦な床面を築いていることがうかがえる。平面形は８ｍ×５．５ｍの東西に長い長方形を呈する（図４－１－１）。屋根は赤い素焼きのスパニッシュ瓦（Ｓ型（桟瓦））を葺いている（図４－２－１）。葺き土はなく、屋根組みに直接瓦が載せられている。また鎌倉資料に見られる棟持ち柱はない。

ザーヤーの入口は南側に二箇所設けられており、二つとも正面向かって左側が蝶番で取り付けられた木製の開き戸となっている（図４－２－１）。二つの扉の間には、昭和29年の新築における寄付者の氏名を記したセメント製の芳名板が設けられている（図４－２－２）。開口部は横幅約70㎝を測る。戸を開けて入ると、25㎝ほど奥から幅広となり、横幅は最大で90㎝を超える。

なお東側の戸の敷居近くに銭貨２枚（西側：50円玉（昭和49年）、東側：１００円玉（平成15年））、

前面の芳名板の前にも銭貨1枚（10円玉（昭和53年））が置かれていた。

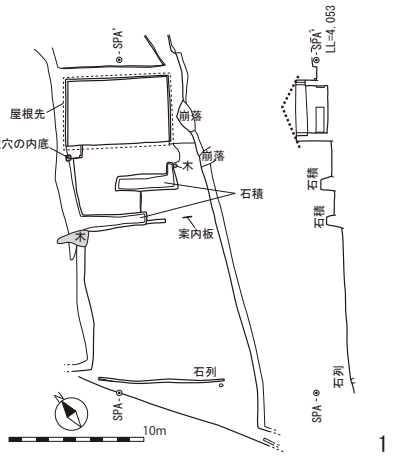
壁は石積とセメントで構築されており、地面から下半部はセメントで目を埋めた石積、その上はセメントの打ちっ放しになっている。セメント壁部はザーヤーの手前ほど高く、奥ほど低くなっている（図5－2－5）。斜面地であるため、壁を地面に垂直に同じ高さに建てると上面の高さが一致しないことから、セメント壁部の高さを変えて調整した可能性が考えられる。

石積壁部とセメント壁部の接合部は全周に渡って段が設けられ、物置棚として使われている。さらに木製の棚が増設され、たらいなどが置かれている箇所もある（図5－2－5）。セメント部奥側に当たる北西壁の東側と、北東壁の奥壁側にはそれぞれ窓が設けられている（図4－2）。窓には横方向の格子が設けられる。

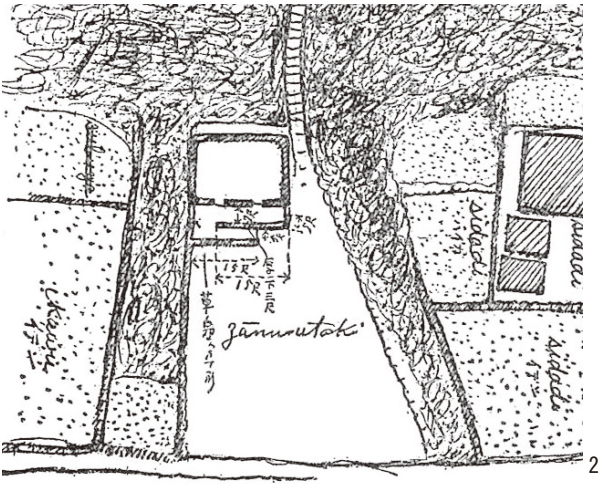
また内側の四隅の石積部にはサンゴ石で作られた15～20㎝の突出部が設けられており（図5－2－6）、これも何かを配置するための台と推察される。下地克子氏によればロクソクの台とのことだった。

ザーヤーの床には、セメントブロックを加工して作った礎石が一面に並ぶ（図5－1、図5－2－1、2）。2019年3月まで全体が上げ床になっており、床材を支えるためのものであることが、南西角に残った上げ床の一部から確認できる。そして北西角にはブロックで囲まれた一角があり、複数の被熱した石「火の神」と香炉が確認される（図5－1、図5－2－3）。

図4-1　ザーの外観



1



2

1、2019年調査時の平面図、断面図　　2、1923年調査時の平面図

図4-2　ザーの外観

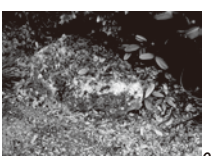
1

2

3

4

5



6

1、ザーヤー外観（南から撮影）
2、ザーヤー南壁の芳名板（南から撮影）
3、石列（囲み内　南から撮影）
4、北側の石積（東から撮影）　5、南側の石積（東から撮影）
6、道路の大石（北から撮影）

図5-1　ザーヤー内部

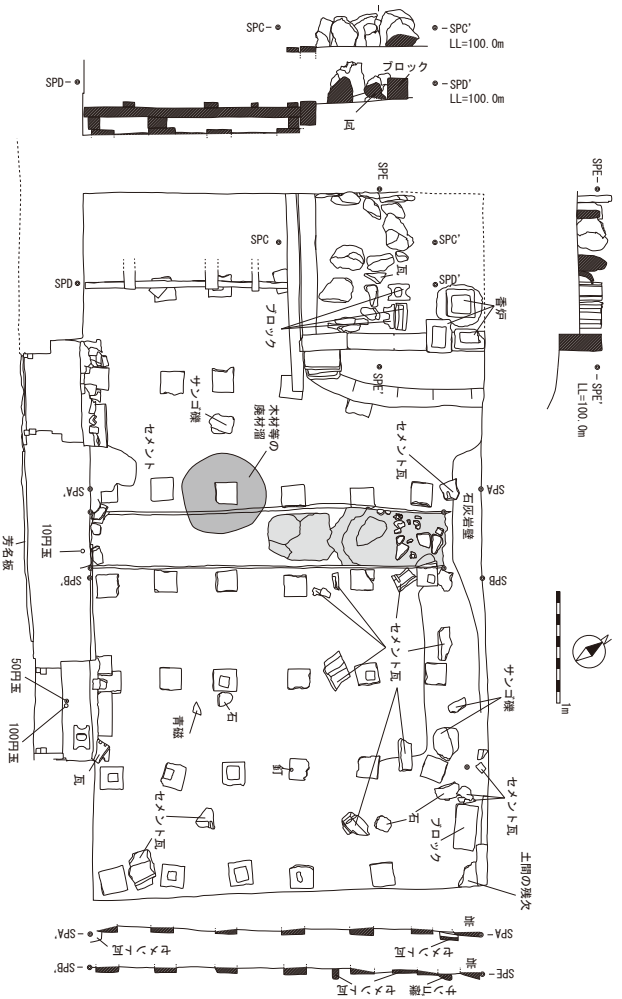

SPC'
LL=100.0m
SPD'
LL=100.0m
SPE'
LL=100.0m
1m
SPA
SPB
SPC
SPD
SPE
SPA'
SPB'
SPC'
SPD'
SPE'
ブロック
瓦
セメント瓦
石灰岩礫
サンゴ礫
木材等の腐材溜
セメント
10円玉
50円玉
100円玉
男名板
青磁
石
釘
土間の落欠
棚
セメント瓦
サンゴ礫
セメント瓦

図5-2　ザーヤー内部

1

2

3

4

5

6

1、全景（東側　西から撮影）
2、全景（西側　東から撮影）
3、火の神と香炉（北東角　南から撮影）
4、窓と壁面（東辺北側　西から撮影）
5、棚と壁面（西辺南側　東から撮影）
6、角の突出部（南東角　北西から撮影）

物入

ザーヤーの前面外壁の西端に貼りついて、周囲より約30㎝高い一辺約１ｍの略正方形のセメント叩き床が確認される。またその上に当たる前面壁には横方向に二本の材が渡されている（図４－２－１）。隣家の住人の方によれば物入が設置されており、二本の材は棚の痕跡ではないか、とのことだった。

石列

ミナーの南端に、ザーヤーと並行（東西）方向に石を埋め込んでいる（図４－１、図４－２－３）。何らかの境界線と推察されるが、段を構成している訳では無く、役割や意味づけは不明である。

石積

ザーヤーの前面には東西方向に伸びる南北2列の石積が設けられ、間が通路となっている（図４－１－１、図４－２－４、図４－２－５）。ザーヤーに入るためには、南側の石積の東側を回って北側の石積との間の通路を西へ向かい、突き当りで北へ向くこととなる。北側の石積（図４－２－４）は東端が北へ曲がり平面Ｌ字型を呈する。南側の石積（図４－２－５）はザー全体を区画する石積の西側部と連結する。

大石

ザー前の道を挟んで対面に、大石が確認される（図４－２－６）。下地克子氏によれば、元々ザー

の庭にあったという。

2－3．トレンチ調査の成果（図6、図7）

ザーの下部構造、構築年代、過去の土地利用を明らかにすることを目的に、ザーヤー内部中央を南北に縦断する幅50㎝のトレンチを設けて掘り下げた（図6）。上述の通り、ザーヤーの床は高所を削平し低所に土盛りして平坦にしていると考えられることから、発掘調査によって削平と土盛りの時期が分かれば、ザーヤーの構築時期を推察できよう。

発掘調査期間内に、トレンチ内全体を基盤層となる岩盤まで掘り切ることは出来なかったが、トレンチ北側の一部に岩盤が検出された。また6つの層序を確認し、東壁でサンプル採取を行った。

1層：Hue7.5YR 3/1　黒褐色土　しまりなし。粘りなし。径30㎜以下の小礫を少量含む。

2層：Hue7.5YR 3/3　暗褐色土　しまりなし。粘り弱。径5㎜以下の小礫を少量含む。

3層：Hue7.5YR 3/3　暗褐色土　しまりなし。粘りややあり。径5㎜以下の小礫を少量含む。

4層：Hue7.5YR 3/3　暗褐色土　しまりややあり。粘りややあり。径50㎜を超える礫、貝を少量含む。

5層：Hue7.5YR 3/1　黒褐色土　しまりややあり。粘りややあり。径30㎜以下の小礫、貝を少量含む。

図6-1　ザーヤー内のトレンチ調査

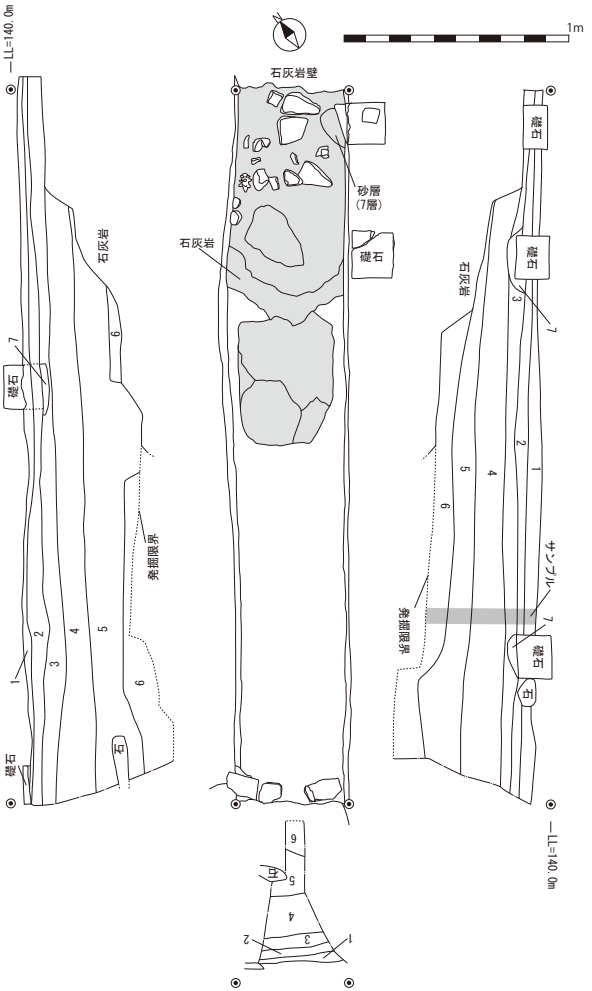

1m
石灰岩壁
砂層
(7層)
礎石
石灰岩
礎石
礎石
礎石

図6-2　ザーヤー内のトレンチ調査

1

2

1、トレンチ完掘状況（南から撮影）
2、ブロック礎石の断面（西から撮影）

6層：Hue25YR 3/6　暗赤褐色土　しまりあり。粘りややあり。径35㎜以上の礫、貝を微量に含む。
7層：Hue10YR 8/3　浅黄橙色土　しまりなし。粘り弱。海浜砂。
※土層の色調は『標準土色帳』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。

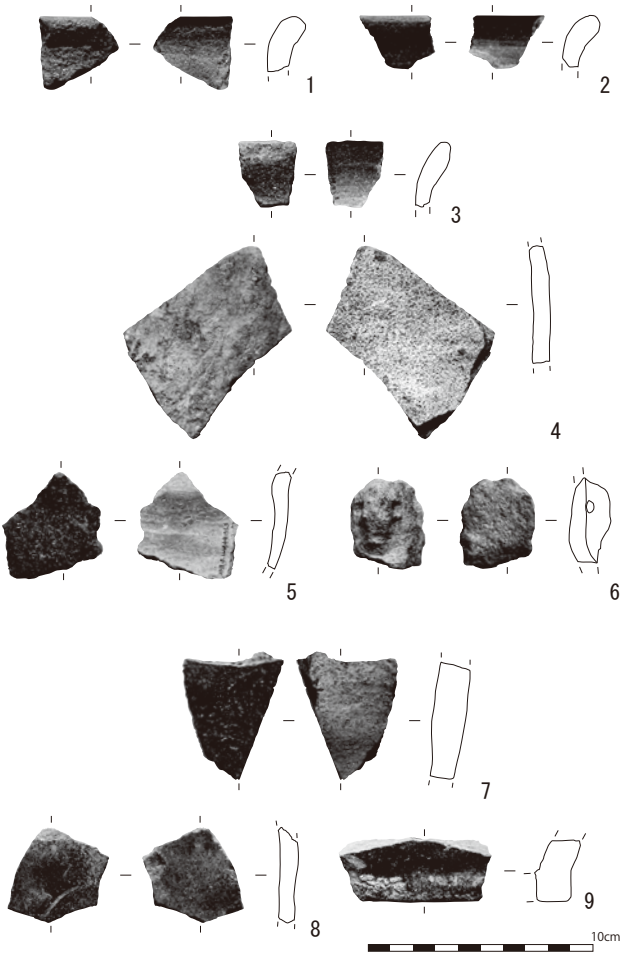
1、2、3層からは、宮古式土器や青磁と共に、鉄製の王冠や丸釘、ビニール袋片、ボタンなどが確認された。遺物の年代から近現代期に位置づけられる。

そしてセメントブロックを加工して作った礎石が1層上面から確認できる。土層断面を観察すると、3層上面からピットを掘り込んだ上で、ピット内に厚さ数cmの海浜砂（7層）を敷き、その上に据えていることが確認できる（図6－1、図6－2－2）。海浜砂は礎石を安定させ、また上面を水平に微調節するための措置と推察される。筆者は西表島網取村跡の屋敷跡で、砂と土の互層による礎石固めの類例を実見している。

4層は、上面でトレンチ北側で礫群が検出される。トレンチ中央や南側では硬化面が検出され、ブロック礎石下の砂層の下面ともほぼ一致する。硬化面より下層では礫や貝を多く含む。出土遺物（図7－1、7－2）は15世紀後半から16世紀前半に位置づけられる中国産の青磁、褐釉陶器、宮古式土器が圧倒的に多いが、僅かながら沖縄産陶器が出土する。白化粧土を施した沖縄産施釉陶器（上焼）の破片も出土しており（図7－2－5）、18世紀代まで幅を持つ可能性がある。

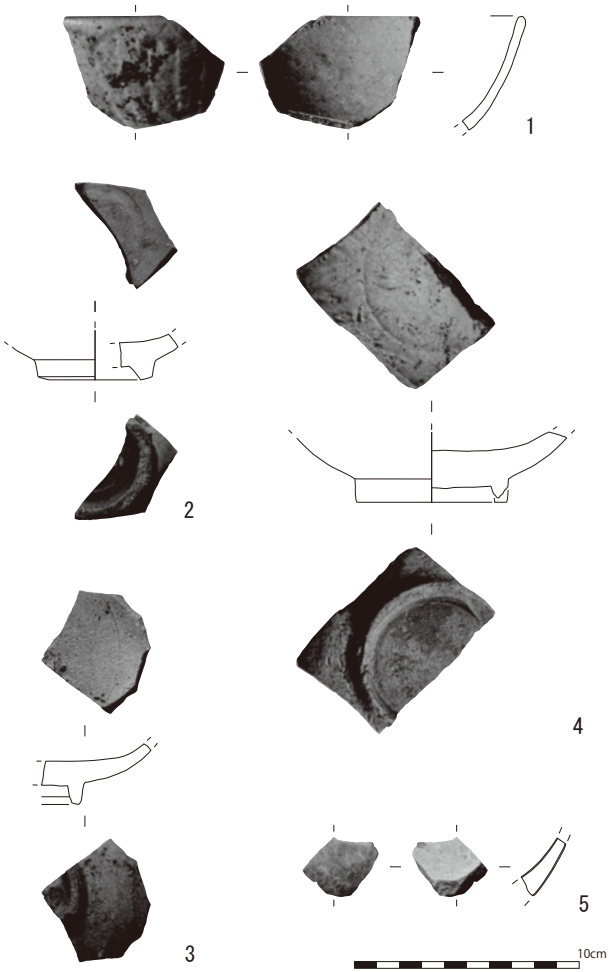
5層も上面が硬化面となり、その下には4層よりは小振りの礫や貝を含む。中国産の青磁、宮古式

図７-１　ザー内トレンチ第４層出土遺物



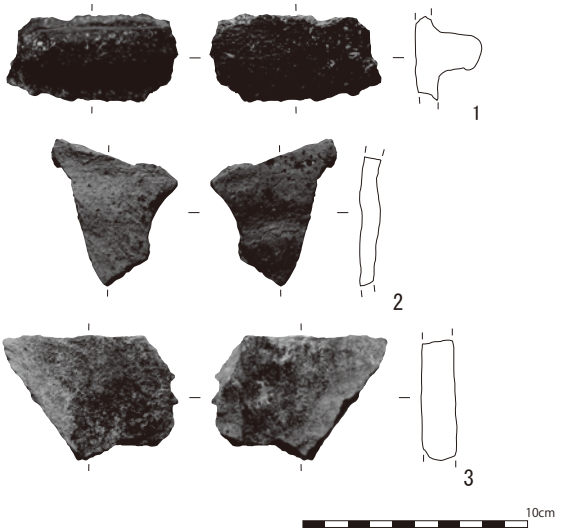
1～6、宮古式土器　　7～9、中国産褐釉陶器

図7-2　ザー内トレンチ第４層出土遺物



1～4、青磁　　5、沖縄産施釉陶器（上焼）

図7-3　ザー内トレンチ第5層出土遺物



1、野底式土器　　2、宮古式土器　　3、中国産褐釉陶器

土器が主体となり、15世紀後半から16世紀前半に位置づけられよう。ただ5層内からは13世紀後半から15世紀前半に位置づけられる野城式土器が検出されており（図7－3－1）、現時点で狩俣集落内における最古級の資料となる。ただ5層出土資料の主体とはならず、古い遺物が造成時の盛り土に紛込んだ可能性を考えておきたい。

6層は暗赤褐色の粘土層である。造成層の可能性はあるが、人工物を含まず、年代ははっきりしない。時間的制約があったこと、当初の目的を達したものと判断したことから、6層を検出したところで発掘限界とし、本調査を終了した。

3．考察

以上の調査結果を踏まえ、分析と考察を試みる。

ザーヤーの発掘調査では、傾斜する石灰岩の岩盤上に6層の堆積が確認された。出土遺物の年代から、4層、5層とも15世紀後半から16世紀前半が主体となるが、5層には最大で13世紀後半まで遡り得る資料が含まれ、4層には18世紀代の資料が含まれており、年代差があると考えるべきだろう。両層とも上面が硬化面となり、これを人間活動の痕跡と解釈するならば2時期の利用が考えられる。また4層、5層は貝類を含むが、これは造成に伴って埋められたとも解釈出来よう。

それ以後は近代期まで人工遺物も貝類も少ないことから、日常的な生活空間としてでなく、特殊な場として使用されていた可能性が高い。

調査結果を踏まえると、ザーヤー建設以前の土地利用方法は不明だが、5層からの野城式土器の出土は狩俣集落の歴史が13世紀後半～15世紀前半まで遡る可能性を示している。そして現在ザーヤーが建つ地点において、15～16世紀の何れかの時点で、斜面を平坦に加工する造成がなされたと考えられる。礎石や柱穴等の建築遺構は確認されなかったことから、この頃この場所に建築物が存在したかどうかは厳密には不詳であるものの、鎌倉芳太郎の調査が行われた20世紀前半期から現在に至るものと同様の構造のザーヤーであれば、そうした痕跡は残らないであろう。この点を明らかにするには、かつては存在したらしい棟持ち株（図2―2）の柱穴を検証する等、広域な面的調査をはじめとする更

なる調査と検討を要する。

その後少なくとも2度の造成が行われ、一度目は4層の年代から15～18世紀の何れかであろう。二度目は3層の年代とブロック礎石から近現代期に行われたと推察され、鎌倉資料にはブロック礎石や上げ床の記録がないことから、１９２３年以降であろう。

なお鎌倉資料には、ザーヤー内の北側の壁近くに礫が敷かれた絵図があり（図2－2、3）、4層上面の礫群はこれと関連する可能性がある。ただ鎌倉資料では丸石に描かれており、形状が異なるため可能性に留まる。今後の課題としたい。

鎌倉芳太郎氏の調査（鎌倉１９８２：20、22）を始めとする過去の記録と、今回の調査で明らかとなった現状を比較すると、ここ１００年間のザー、ザーヤーの変遷についてより詳細な検討が可能となる。管見の限り、過去のザーヤーの様子が確認できるのは、１９２３年の鎌倉氏の調査記録（鎌倉１９８２）、１９５４年に修理した際の芳名板の記録、１９７２年、１９７４年、１９７６年のウヤーン祭祀の写真記録（上井他２０１８：１０８－１０９、比嘉１９９１：18）、１９７５年のウヤーン祭祀の手記（上井他２０１８）である。これらのデータと、２０１９年の調査データを比較することで、ザーヤーの概ねの変遷を追うことができる（表）。

１９２３年に撮影された写真（鎌倉１９８２：13）と２０１９年時点の状況を比較すると、ザーヤー前面の石積の位置に変化はないが、使われる石材の違いが確認される。場所を移動させないまま

修復が繰り返されてきたことがうかがえる。なお１９７４年に撮影された写真（上井２０１８：１０８）と照合すると、現在と同じ石材が使われていることがうかがえる。

ザーヤーの内部は、ブロック礎石を用いた上げ床や、火の神周りのブロック区画等、変更された諸点が認められる。下地克子氏によれば、大きな香炉は移動させ、元々は丸い大きな石にセメントの立方体が接合した台の上に置かれていたとのことであった。ただ鎌倉資料と比較すると、、位置は変更されているが、同じ香炉、火の神が確認できる。北西は火の神と香炉が位置し、南面した２つの入口がある等、場所ごとの利用法や全体の寸法は踏襲されている。

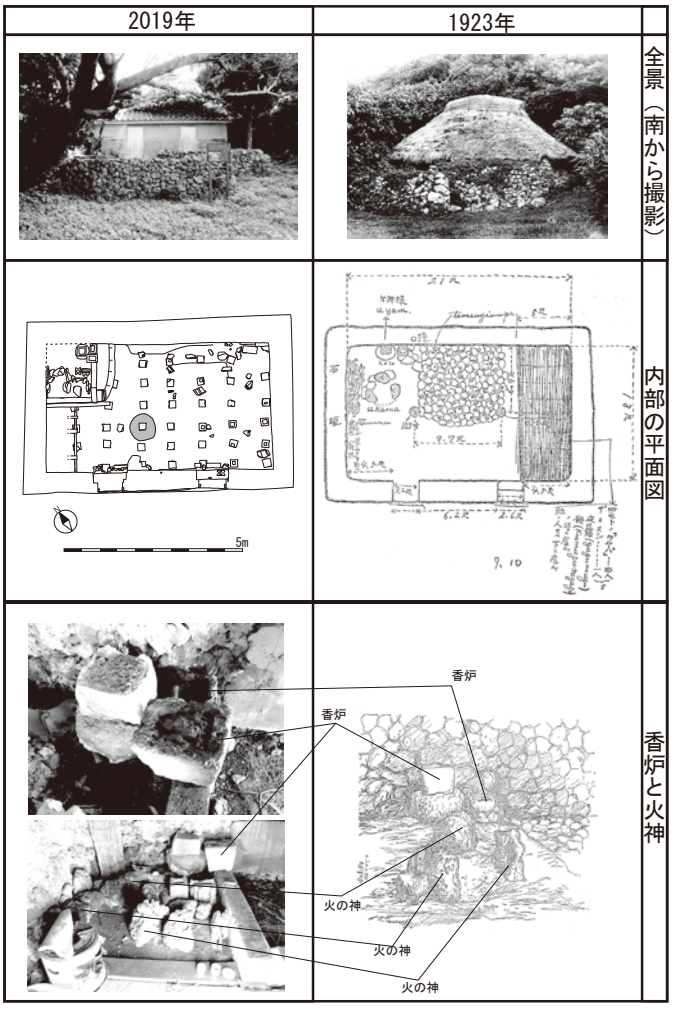
ザーヤーの内部は１００年前からの伝統を継承して来たことがうかがえるが、外観の変化は大きかった。１９２３年時の屋根は急勾配の茅葺屋根となっており、ザーヤー全体が高さ12・5尺と記録されている。壁は写真からはほとんど確認できないが、図面と僅かに写った東端から、石積であったことが確認される（図２－１、２）。入口は現在と同じく二カ所記載されるが、扉の記載はないことから開口したままであった可能性も考えられよう。

しかし１９７２年に撮影された写真（上井他２０１８：１０９）では緩勾配のセメント瓦屋根になっている。壁は目地をセメントで埋めていると思われるものの、石積のままである。壁の高さを変えずに屋根を下げたのなら、屋内は天井が低く狭くなったであろう。１９７４年撮影の写真（比嘉１９９１：18）でも、屋根と壁は72年と同様である。狩俣のウヤーンを調査したもろさわようこ氏の

表　ザーヤーの変化

	1923年	1954年	1972, 74, 75, 76年	2019年
屋根	急勾配の茅葺。土間から棟内面まで12・5尺	?	緩勾配のセメント瓦葺。	緩勾配の赤瓦葺。土間から棟内面まで約3・6m
壁	石積	石積	石積	下半：石積（セメントで目止め）上半：セメント
扉	扉無し？西側開口部幅3・2尺東側開口部幅2・6尺	?	板戸。開口部幅約90cm？	板戸。開口部幅約70cm
床	東には高さ1尺の一段高い座敷。中央は奥から屋敷内中央付近まで石敷。西奥には土間の高さに火の神。	?	?	全体に高さ約20cmの高床の板敷き。西奥に高さ約20cmのブロック囲いされた火の神。
出典	鎌倉1982	遺構の芳名板	上井他2018：108―109比嘉1991：18	

図8　ザーヤーの変化



１９７５年の記録によれば、当時のザーは「人造のスレート瓦屋根・板戸粗末な十坪足らずの古びた小屋だった」という（上井他２０１８：２１４）。また70年代の記録には２つの入口に扉があることが確認できる。

なお上地太郎氏による『狩俣民俗誌』にも、年代不明ながらセメント瓦葺きのザーヤーの写真が掲載されている（図２－５　上地　巻頭写真）。やや不明瞭だが、屋根と壁は72年、74年撮影の写真と同様であることがうかがえる。また前面の石積には現在と同じ石材が使われている。

資料の年代から、１９２３年から１９７２年までの約半世紀間に、茅葺・石積壁からセメント瓦・石積セメント併用壁への変化が発生したと考えられよう。現在のザーヤー南壁には昭和29年の改築を記録した寄付者の芳名板があることから、戦後間もない時期に変化した可能性が考えられるものの、具体的な改築内容は記載されておらず断定はできない。外観の大きな変化がこの半世紀中の何れかに生じたのか、絞り込むのは難しいのが現状である。さらに１９７２年から２０１９年までに、赤瓦葺きのザーヤーに改築されている。鎌倉芳太郎の調査から約一世紀の間もザーヤーは様々な変化を遂げたことがうかがえる。

小結

聖地の発掘という難しい調査だったが、予想を上回る多くの知見を得ることが出来た。ザーの成立時期は15～16世紀と推察される。ザーと結びつくウヤーンは、『琉球国由来記』の記載から17世紀後半には存在したことはうかがえるが、今回の調査により更に遡る可能性が出て来たことになるだろう。なお女性が枝葉を持ち呪術を行う記載が１５００年の「オヤケアカハチの乱」を巡る記録（球陽研究会１９７４：１８９）に登場することはよく知られる。儀礼行為は遺物や遺構として確認しづらいが、間接的であっても証拠を積み上げることで追究することも不可能ではないだろう。そして野城式土器の出土は、ザーヤーが存在しなかった、少なくとも現在の地点にはない時期にも、狩俣集落に人間活動があったことをうかがわせる。

今後の課題として、周辺の諸施設との関係性の追究が挙げられる。中でもザーと深い結びつきを持ち注目されるのが、ザー後方に位置する天道（ティンドー）である。丘陵の頂点に位置する開けた広場に円形の石積が置かれたこの空間は重要な聖地とされる。奥濱幸子氏によれば、大きな神はティンドーに天降りしそこを通って集落に降臨し、祭礼を終えると再びティンドーを通って戻る。一方、集落の随所に鎮座する小さな神は素朴な信仰の対象であり、天道を通過する神にはならないという（奥濱２０２０：２２９）。ザーの儀礼はその前後にティンドーでの儀礼を挟んでいることから、ティン

ドーはザーのいわば出入口の役割を担っているとも考えられよう。今日知られるウヤーンの成立を明らかにするためには、両者の関係性を追究していく必要がある。

【注】

（1）本調査終了から約1年後、『宮古新報』紙上において発掘調査に対する反対意見が掲載された（狩俣2020、新里2020a、2020b）。本稿では、ザーの発掘調査に関わる一連の経緯について時系列に従って記し、本調査が関係者への事前の説明を実施した上で行われ、また聖地に対する敬意を失するものでは無いことを示したい。なお調査開始前と来訪時にも必ずその時の自治会長とアブンマへ目的と予定を伝えて了承を得ていることも明記しておく。

2019年3月8日～11日　集落内の踏査、遺跡・遺構確認。この時すでに腐食老朽化したザーの床が取り払われて土間になっていることを確認し、自治会長（当時）とアブンマ（当時）に翌年度4、5月連休時の発掘調査を提案。4月の自治会にて議論いただくこととなる。3月9日に宮古島市立中央公民館で開催されたシンポジウムでこれまでの調査成果を発表（石井2019b、c）。

2019年3月　狩俣自治会長（当時）、アブンマ（当時）に充てて「狩俣集落発掘調査　2019年度計画」を送付（2019年3月18日付）。宮古島市教育委員会の担当者に調査内容を連絡して妥当性について相談し了承を得、また調査中の現地確認を依頼。

２０１９年４月５日　狩俣自治会総会にて、提出した計画書に基づいた調査内容の説明が行われ、実施の可否について議題となり、了承される（自治会長（当時）よりその旨ご連絡いただく）。

２０１９年４月27日～５月６日　ザー内の発掘調査。事前にアブンマ（当時）に神願いをしていただき、調査チームが揃った５月１日に改めて神願いをしていただく。調査中は現場を開放し、来訪者に逐次説明。宮古島市教育委員会の担当者も来訪し現場を確認。終了後、現場は埋め戻して発掘前の状態に戻す。

【引用・参考文献】

石井龍太　２０１９ａ『展示：考古学から見た近世琉球』沖縄県立博物館・美術館、２０１９年２月９日～11日

石井龍太　２０１９ｂ「「宮古・狩俣遺跡の発掘調査概要」『公開シンポジウム「宮古諸島における15～17世紀の集落」～残された「モノ」から読み解く～』、宮古島市教育委員会、２０１９年３月９日、宮古島市立中央公民館

石井龍太　２０１９ｃ「宮古・狩俣遺跡発掘調査概要（２０１５～18年度）」『平成30年度地域の特色ある埋蔵文化財公開活用事業　最新の研究成果に見る宮古の歴史　№３　―文化講座資料集・記録集―』：77―82

石井龍太、山本正昭、阿部常樹、久我谷渓太、浦山隆一、鎌田　誠史　２０１８「宮古島狩俣集落　土塁調査概報」『東南アジア考古学』38：57―61

伊波普猷・東恩納寛惇・横山重　１９６２『琉球史料叢書　第二』井上書房

上地太郎（年代不明）『狩俣民俗誌』
上井幸子・もろさわようこ・比嘉豊光　２０１８『太古の系譜　沖縄県宮古島の祭祀』六花出版：１０８―１０９
内田順子　２０００『宮古島狩俣の神歌』
岡本恵昭　１９７０「宮古島の祖神祭　―狩俣・島尻村を中心として―」『沖縄のまつり』：１６３―１８６、国際アートコンパニオンまつり同好会
沖縄県沖縄資料編集所　１９８３『沖縄県史料　近代４　上杉県令沖縄関係資料』
沖縄県教育委員会　１９８３『宮古の遺跡』
奥濱幸子　２０２０「字狩俣の年間祭祀」『宮古島市史　第二巻　祭祀編（中）悉皆調査〈平良地区〉』：１８９―２６２、宮古島市教育委員会
鎌倉芳太郎　１９８２『沖縄文化の遺宝』岩波書店
狩俣幸男　２０２０「狩俣集落文化遺産守ろう」『宮古新報』２０２０年５月４日号：８
狩俣吉正　２０１１『沖縄・宮古島　狩俣民俗誌』メディアエクスプレス
狩俣歴史文化村創成会　２０１５『狩俣の伝説』
球陽研究会　１９７４『球陽　原文編』角川書店
佐渡山正吉　１９９４「地名と屋号で見る狩俣集落の変遷」『平良市総合博物館紀要』第１号：６９―８０

佐渡山正吉　２００８「パネル討論資料　―狩俣の祭祀の現状と課題―」『第15回講演とシンポジウム　テーマ「狩俣の神・人・自然」』宮古島の神と森を考える会・狩俣自治会
新里幸昭　１９９３「宮古島狩俣の祖神祭と久高島のイザイホー」『沖縄・久高島のイザイホー』：１３２―１４７、砂子屋書房
新里幸昭　２００５『宮古歌謡の研究』沖縄自分史センター
新里幸昭　２０２０ａ「狩俣の象徴―神山と祭場―その発掘調査に反対する　―上―」『宮古新報』２０２０年５月12日号：７
新里幸昭　２０２０ｂ「狩俣の象徴―神山と祭場―その発掘調査に反対する　―下―」『宮古新報』２０２０年５月12日号：４
玉木順彦　１９８８「宮古島北部村落にみる祭祀の変遷　―ウヤガン祭を中心に―」『窪徳忠先生沖縄調査二十年記念論文集　沖縄の宗教と民俗』：４８３―５０５、第一書房
田村浩　１９６９『琉球共産村落の研究　五〇〇部限定再販』沖縄風土記社
比嘉光雄　１９７０『郷土』９
比嘉康雄　１９９１『神々の古層③　遊行する祖霊神〔ウヤガン・宮古島〕』ニライ社
平良市史編さん委員会編　１９８１『平良市史　第三巻資料編１　前近代』
山田浩世　２０１３「近世琉球・奄美における災害と気候変動問題―１７８０・１８３０年代を中心に―」

『２０１１年度トヨタ財団研究助成採択プログラム　沖縄・奄美島嶼社会における行政防災施策・制度・システムの歴史的変遷に関する包括的研究成果報告書』：83―98
『宮古島記事仕次』阪巻・宝玲文庫（ハワイ大学所蔵）HW664, https://shimuchi.lib.u-ryukyu.ac.jp/collection/sakamaki/hw664

【図の出典】

図1、「空中写真」（国土地理院）（https://maps.gsi.go.jp/#17/24.895760/125.276456/&base=ort&ls=ort&disp=1&vs=c0g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1&d=m）をもとに作成
図2、1～4、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵　5、上地：巻頭写真
図4―1―2、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵（ザー以外はトリミング）
他は筆者が撮影、作成した。